

国語総合	報告課題第四回	年	組	氏名
	解説			

【日本語のこころ】

まず、全文を読んでみましょう。

この単元は、全部で五段落となっており、また、これまでの単元とは違い、説明的文章となっています。表現や文節などに注意が必要です。

- ① 初め～四四ページ九行
  - ② 四四ページ一〇行～四五ページ一五行
  - ③ 四五ページ一六行～四六ページ七行
  - ④ 四六ページ八行～四七ページ三行
  - ⑤ 四七ページ四行～終わり
- となっています。

第一段落の内容要約―日本語では、肉体に関してあまりはっきり言わない

実際は尻を掛けるのに、「腰を掛ける」、ももを枕にするのに「膝枕」、小さい耳で聞くのではなくちよつと耳に留める、の意味で「小耳にはさむ」など、日本語では肉体に関してあまりはっきり言わないことがある。

第二段落の要約―日本語は論理的ではないと評価される。

日本語はよく論理的でないと評価される。理髪屋で髪を刈ってもらうのに「頭を刈る」と言う。注射してもらってきたのに、「注射してきた」と言う。また、「お湯を沸かす」「飯を炊く」「ホームランを打つ」「嫁をもらう」など、結果を先取りして簡潔に言うのが日本語の言い方である。

第三段落の要約―日本人は短く言おうとすることが多い。

日本人は短く言おうとすることが多い。たとえば、食堂で何を食べるかきかれた際に、「僕はウナギだ。」と答えたり、「あそこの店の寿司はうまいよ。」ではなく、「あそこの寿司屋さんはいよ。」と言ったりする。

第四段落の要約―日本人は自分を責めて相手に謝ろうとする

本屋で探している本が見つからなかったとき、店員は「(その本は)ごさいません。」ではなく、「(その本は)ごさいませんでした。」という。それは、「(その本を)当然用意しておくべきでありました。しかし、不注意で用意してごさいませんでした、申し訳ありません。」という気持ちであり、その気持ち「でした」に現れているのだ。そして客はその気持ちをくみ取る。これは常に相手を慮る日本人の優しさの現れではないか。

第五段落の要約―日本人の言葉遣いには、日本人の責任感の強さを感じさせるものがある

自分の不注意でコップが割れた際にも、日本人は、コップの割れた原因は自分にあると考え、「コップを割りました。」と言う。この簡潔な言い方の中に、日本人のすばらしい道義感が感じられる。日本人にそういった気持ちを根づかせてくれた先祖たちに謹んで頭を下げたい。

### 【言葉の海のおノマトペ】

この單元も、「日本語のこころ」と同様、説明的文章で構成されています。内容も難しいものになっているため、適宜、調べながら読み進めていきましょう。

- ① 初め～五〇ページ八行
  - ② 五〇ページ九行～五一ページ七行
  - ③ 五一ページ八行～五二ページ一一行
  - ④ 五二ページ一二行～五三ページ一三行
  - ⑤ 五三ページ一四行～終わり
- となっています。

#### 第一段落の内容要約―言語記号の恣意性

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールが「言語記号の恣意性」を発見した。「言語記号」とは言葉として発せられる音声のことである。その音声と音声によって表される意味との間にはこれといって因果関係がないことを「言語記号の恣意性」という。

#### 第二段落の要約―言語記号の恣意性がもたらすメリットとデメリット

音声と意味の間に何の必然性もないからこそ、人類は森羅万象、過去も未来も、真実もウソも語るができる。その反面、音（の組み合わせ）と意味を、一つ一つ頭の中で結びつけながら、ひたすら覚えていくしかない。

#### 第三段落の要約―言語記号の恣意性の例外であるオノマトペ・擬音語

擬音語・擬態語の一群はオノマトペと言われ、言語記号の恣意性の例外であり、音声と意味とが密接に結びついている。特に擬音語は、まさしく「音をまねした単語」であり、音即意味である。日本語はこのオノマトペが特別発達している。

#### 第四段落の要約―言語記号の恣意性の例外であるオノマトペ・擬態語

擬態語は様子を模写したもので、本来、「様子」に音はないはずだが、擬態語にも擬音語と似たような、音と意味との対応がある。たとえば、音質や単語の長さの意味との間に一定の対応が見とれる。

#### 第五段落の要約―キラキラ光る星はきれいだが、ギラギラ光る星はちよつと怖い

「ものすごくハラハラした」からといって、「バラバラした」とは言えないし、いくらお星さまが明るくても、星が「ギラギラ」したとは言えないなど、オノマトペも言葉である以上、恣意的なところ、つまり例外も多い。

それを踏まえたうえで、報告課題に取り組んでいきましょう。